

Title	プルウドンとマルクス
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1929
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.23, No.8 (1929. 8) ,p.1053(1)- 1127(75)
JaLC DOI	10.14991/001.19290801-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19290801-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



(豊國銀行横)



優秀のスタイル
正確の日程
御用制服塾義應
秋山洋服店

芝區三田四國町六 電話三田(45)三七九二

史 學

第八卷 第二號

(日 繪)

- 歐洲人の極東研究(一) 松本 信廣
- 日本に於ける捨子の研究(承前) 徳田 彦安
- 唐宋牙人考 小林高四郎
- ベリーのイギリス最古の文明 間崎 万里
- 五車一得(其二) 中島 竦
- 日本原始古代社會と不斷の聖火 井手 一馬

(書評) 埃及紀行◎世界的日本主義◎Proslet (Abbe). Le

Martyrologe de l'Eglise du Japon (1549-1649)

◎弘法大師遺論史◎八十島祭考證譯語と専門の譯

語◎口繪説明

(彙報) 平泉松島仙臺地方見學記

會費年四圓 定價一冊一圓 郵稅六錢

編輯所

三田史學會

發行所

大岡山書店

發賣所

丸善三田支店

三田學會雜誌

第二十三卷

第八號

プルウドンとマルクス

加 田 哲 二

本篇は本誌六月號所載拙稿「プルウドンの財産論とその獨逸における反響」の續篇を形成するものである。

一八四〇年「財産とは何ぞや」によつて、一躍佛蘭西論壇にその文才を認めらるゝに至つたプルウドンは、翌年の春、財産論に對する第二論として、「財産に關してブランキイ氏に與ふる書」(Lettre à M. Blanqui sur la Propriété)を執筆した。プルウドンは一八四一年五月、アッカアマンに書き送つてゐる。「自分はブランキイに與ふる書

翰の形ちで財産に關する第二論を恰度今公刊した。この第二論はつまり第一論と著者の辨明を含んでゐる。私はその内で例へば四千年以來の人類をその不斷の平均的運動において理解したこと、佛蘭西社會が無意識的に、その指導的熟練によつて、日々に財産を破壊しつつあること、すべての學派が財産を呪咀してゐること等の新見地を展開した。この傾向及び學說の歴史的並に批評的敘述は、自然的に、次の如き結論に到達する。即ち必然性そのものが、吾々を騙つてゐるから、吾々はこの軌道の上を前進しなければならぬ。——この著作は第一の著作よりも、すべての人に對して、よりよく書かれ、一層面白く、溫健に見える。ブランキイは最も阿諛的なことを、これについて、私にいつた。彼は私にもつと溫健になることを忠告し、それさへすれば、科學の中心に取り上げらるべきことを、私に約束したのである。(註一)

註一 Milberger, Proudhon, Ss. 35-36.

財産に關する第二論はその趣旨において、全く第一論と同じである。彼はその序論において、「その人格の尊嚴において、平等であり、法律の前に平等である人は

その生存條件においても、平等でなければならぬ」(註二)といふ命題が第一論の主題たることを宣明してゐるのであるが、第二論はこの命題の擴大深化であつて、殊に財産に關する歴史的的特殊性、並に財産の歴史的發展に關する概觀を與へた點において、第一論の繼續と見るべきものである。

註二 Proudhon, What is Property? p. 278.

一八四二年一月には、財産に關する第三論が現はれた。「有産者に告ぐ、またはヴクトル・ロッシンデラン氏への書翰」(Avertissement aux Propriétaires ou Lettre à M. Victor Considérant, Rédacteur de la Phalange, sur une Défense de la Propriété)といふのがその表題であつた。その表題の示すやうに、財産論第三論はフウリエ主義者の頭目コンシデランのプルウドンに對する批判の反批判であつて、プルウドンは他の社會主義に對する自己の批判的態度を表明すべき機會を與へられたのである。即ち他の社會主義者の共產主義及び現制度と共產主義との折衷的主張に對して、根本的批判を加へたのである。

要するに、財産論三篇は、一の一體を形成するものである。第一論は財産問題に

關する絶對的觀察方法を克服し、第二論は數千年間に渉る財産の變遷を解明し、財産をもつて文明世界の造物主となし、第三論は共產主義的ユウトピアを解消すると共に、折衷的政策の無價値を論證したものである。要するに、財産論第二及び第三論は既にいつたやうに、財産論第一論の擴大深化を意味することにも、この三者が一體として、著作の全體的價値を構成するものであることは論を俟たない。(註三)

註三 Milberger, pp. 35-45.

財産論を完成したプルウドンは、貧困と雑事との間にあつて、自己の社會哲學の構成に突進した。その結果として生れたものは、一八四三年九月の初旬に公刊せられた「人類にもける秩序の創造又は政治的組織の原理」(De la Création de l'Ordre dans l'humanité ou Principes d'Organisation politique)である。プルウドンが如何なる意氣をもつて、この著作に従事したかは、彼のアッカマン宛の書翰が最もよく、これを表はしてゐる。私は、カントによつて呼び起された革命よりも、より大なる革命が哲學研究に對して、自分の著作から起さるゝことを期待する。哲學的研究は、思想家の世界にこれまで全然聞くことのなかつたものを、而して、その全體とその微細

部分において、全然新らしい世界觀を開拓するところのものを、余において、發見するであらう。而して、その作用は、たゞニウトンの體系が喚び起したところのものに、比較し得るのみであらう。獨乙人は偉大なる思索家といふよりは、寧ろ穿鑿家であるが、よくこのことを解するであらう。(註四)

註四 Milberger, Proudhon, S. 47.

この著作は果して、彼の所期の目的を到達せしめたであらうか。否。彼はこの書において、期した精神的革命をも、また世間的反響をも、財産論の場合のやうには行かなかつたのである。彼の後年の述懐はこのことを明かに示すとともに、彼のこの書にもける立場を最も明瞭に物語るものである。

「批評は否定するだけでは充分でない。批評はまた肯定し、且つ再建しなければならぬ。さもなければ、社會主義は、ブルジョアジイを驚愕せしめ、民衆には何等利益のない純然たる珍らしがり屋の對象として止まるであらう。このことについて、私が常にいつてゐるところで、これを證するため、空想家の回想もまた保守主義者の回想をも必要としなさい。こゝで、破壊のために役立つ方法は、

建設のためには無力であると思はれる。精神がそれによつて肯定する態度は、精神がそれによつて否定する態度と同一ではない。建設の以前に、矛盾から脱出することは必要であつたし、而して、革命的發明の方法即ち否定的ではなく、オオギュスト・コントの表現に従へば、實證的哲學を形成することが必要であつた。社會即ちこの集合的生物のみ、無條件に、直接に誤ることを恐るゝことなく、その本能に従ひ、その恣意に放任することが出来る。何となれば、社會の中に生き、多數者の表現により、而して個人の思索によつて發展する高級なる理性は、社會を常にその正當なる道に復歸せしめるからである。哲學者は、直觀によつて、眞理を發見することは不可能である。而して哲學者が、社會を指導せんと敢えて企てるとき、彼は、永久的秩序の代りに、彼自身の常に不満足な見解を施し、社會をして、奈落の底に沈めるの危険を冒すのである。彼は指導者を要する。而して、人類の内在的論理そのものである發展の法則以外に誰かこの指導者たり得るであらうか。私が、一方において、理念の絲口を、他方において、歴史の絲口を確保したそのときに、私は社會の意義についての濫奥を極めなければならぬと考

へたのである。私は哲學者たることを止めることなく、豫言者となつた。

かくて、私は『人類における秩序の創造』なる表題の下に、新らしい一聯の研究を始めたのである。……私がこの機會に發表した著作は、その内容において撤回すべきものが、甚だ少ないにも拘らず、自分を満足せしめなかつた。而してこの著作は第二版を重ねたにも拘らず、公衆には、甚だ認めらるゝことが少なかつたやうであるが、それは全く正しいのである。創造と破壊とのすべての道具を具しなければならなかつた眞の爆發機であるこの著作は、悪作であつて、私の材料を選択し、秩序づける時間を私が費してゐたならば、私の作るであらうものよりも、數等劣つてゐる。だから私は既にいつた。私は名聲のために、著作したのではなかつた。私は、この時代のすべての人のやうに、何ごとかを成就することを急いでゐた。私の内にある改革家は、戦士となり、而して、征服者は待たなかつた。その獨創にも拘らず、私の著作は、凡庸である。これは私の罪でなければならぬ！(註五)

註五 Proudhon, Bekenntnisse eines Revolutionärs. (von 1848) Nach der Übersetzung von A. Ruge herausgegeben und

eingeleitet von G. Salomon. 1993. Ss. 191-193.

プルウドンの「人類における秩序の創造」はその最初の意氣組みにも拘らず彼の認めるやうに遂に失敗の作であつた。然も彼は尙ほこの著作の根本思想を誤謬としたのではない。彼は以後數年この根本思想の充分なる研究に従事した。貧困の哲學又は經濟的矛盾の體系は實にその産物であつた。この著作は一八四六年の秋に公刊せられたのであつて、この著作の公刊こそ、マルクスのプルウドンに對する克服事業の最大の動機であり、收穫であつた。吾々はこの著作の公刊にいたる數年におけるマルクスのプルウドンに對する態度を研究することがなくてはならぬ。

二

カール・マルクスは、その思想的傾向並に運動のために、佛蘭西の大臣ギゾウの命令によつて、年餘の滞在在りて巴里から追放せられたのは、一八四五年一月十一日であつた。彼はブルュッセルに來り住むことゝなつた。(註六)一八四八年二月までのブルュッセル滞在中のマルクスの私的生涯については、極めて僅少なる資料

として、一八四七年五月十五日附エンゲルス宛の重要ならざる書翰が存在するのみである。乍併、この三年餘のブルュッセル滞在はマルクスの生涯における最も重要な時代といはねばならぬ。彼は、この時代において、その思想を確立するとともに、實際運動の指導者としての地位を確立し來つたのである。(註七)

註六 Ernst Drahm, Marx-Bibliographie. Ein Lebensbild. Von Karl Marx in biographisch-bibliographischen Daten. 1923. S. 9.

註七 Karl Vorländer, Karl Marx sein Leben und sein Werk. 1929. Ss. 100 ff.

マルクスの思想確立の過程は一の理論闘争として現はれてゐる。理論闘争としての最初の著作は「神聖家族」であるが、彼のこの著作における立場は、通常フォイエルバッハのフマニズムスにありとせられてゐるのである。エンゲルス曰く「この書」『キリスト教の本質』が齎らした救ひの力がどんなものであつたかは、自らこれを體驗した者でなければ想像がつかぬ。世を擧げてこれに感激した。吾々は皆一時の間はフォイエルバッハ信者だつた。如何にマルクスが熱情的にこの新らしい見解を迎へたか、そして如何に甚だしく彼がこれに對する批評は保留し

たに拘らず——この見解に影響されたかは、『神聖家族』を見れば解る』と。(註八)乍併、彼はこの著作においても、單にフョイエルバッハのやうに社會的現象の本質を人間の本質に求めやうとしたのではない。彼は社會的現象の本質を本質的關係に求めるのである。マルクスは批判的批判の歴史的方法を非難していふ。『批判的批判は、彼等が自然に對する人間の理論的並に實際的態度、即ち自然科学と産業とを歴史的運動から除外する限り、歴史的現實の認識において、その發端にさへ到達したと信ずるのであるか。または、例へば、時代の産業、即ち生活の直接生産方法そのものを認識することなくして、ある時代を事實において、認識し得たと彼等はいふのであるか。いふまでもなく、心靈的な、神學的な批判的批判は、たゞ歴史の政治的、文學的、及び神學的な主作用と國家作用とを知るに過ぎない。——少くとも、知つてゐると自負してゐるに過ぎない。批判的批判は、思惟を感覺から、精神を肉體から、自らを世界から引き離すやうに、批判的批判は歴史を自然科学と産業とから分離して、歴史の生誕地を、地上における素朴な物質的生産において見ることなく、天上の霧深き雲の中に求めるのである。』(註九)

註八

Engels, Ludwig, Feuerbach und der Ausgang der klassischen deutschen Philosophie. 8. Aufl. 1922, S. 11. 佐

野文夫譯フョイエルバッハ論三六——三七頁。

註九

Marx-Engels, Heilige Familie 1845. Aus dem literarischen Nachlass. II. Ss. 259-260. マルクス・エンゲ

ルス全集第一卷六七六——六七七頁。

かゝる見地の展開あるが故に、吾々は次の如きリヤザノフの主張に賛同するこ
とが出来るのである。曰く、『マルクスは、既に『神聖家族』において、フョイエルバッハ
の後繼者、即ちその學徒としてより、より、以上のものとして現はれてゐる。このこ
とは、マルクスとエンゲルスとのフョイエルバッハに關する編纂せられた言葉の
比較的分析によつても、もつともよく證明せらるゝであらう。故に、マルクスが『神聖
家族』を終つたときには、彼は既にフョイエルバッハは主義者たることを——また
哲學においても——止めてゐたといふことが出来る。故に、彼にとつては、エンゲ
ルスが既に一八四五年の初めに、既成の事實として見出したフョイエルバッハと
の分離を、行ふことは、甚だ容易であつた。それにも拘らず、『神聖家族』の後に刊行
せられた『英國における労働者階級の狀態』は、なほ一層多く『現實的人本主義』の基礎
に立つてゐたのである。マルクスは、未だ尙ほフョイエルバッハに盟友として望

みを囑してゐたエンゲルスと離れたのである。」(註一〇)

註一〇 Marx und Engels über Feuerbach. Der erste Teil der "Deutschen Ideologie." Einführung des Herausgebers (Rjazanov) Marx-Engels Archiv. I. Bd. S. 216.

フオイエエルバッハに對するマルクスの超克は最もよくフオイエエルバッハに關するテエゼンに現はれてゐる。このテエゼンは一八四五年マルクスによつて、ブルュセルで書き留めて置かれた十一ヶ條の覚え書きである。「從來のすべての唯物論——フオイエエルバッハの唯物論をも含めて——の主要缺陷は、對象が、即ち實在性及び感情が客體または直觀の形でのみ把握されてゐて、人間の感官的活動として、實踐として、即ち主體的に把握されてゐない點である。……フオイエエルバッハは『キリスト教の本質』の中で理論的態度のみを眞に人間的な態度と觀てゐるだけであつて、これに反して實踐は汚らしい、ユダヤ的な現象形態だけを執らへられ、さういふものにのみ限定されてゐる。従つて彼は『革命的』な實踐的、批判的な活動の意義を理解してゐない。『社會生活は本質上實踐的なものである。』哲學者は世界をいろいろに解釋してきただけである。だが肝要なことは、世界を變更するこ

とである。」(註一一)マルクスのこの立場の獲得は、リヤザノフのいふやうに、フオイエエルバッハの「理想的哲學を」行動の哲學に進展せしめることであつた。(註一二)

註一一 Marx, Thesen über Feuerbach. Engels, Feuerbach. Ss. 61-64 佐野文雄譯本、一六三——一七二頁

註一二 Rjazanov, Karl Marx and Friedrich Engels. 1927. p. 59.

マルクスのこの立場の獲得は以上の引用で知ることが出来る通り、一八四五年である。故にエンゲルスはいふ。「この命題——唯物史觀の——は余の見るところによれば、生物學に對して、ダアウイン學說のなしたところを歴史に對してなすべき運命にあるのであるが、吾等二人——マルクスとエンゲルス——は一八四五年の數年以前に徐々として、この學說に近づいた。余が獨立でこの程度までこの學說を形成したかは、拙著『英國勞働者階級の狀態』に最もよく現はれてゐる。しかし、余が一八四五年の春、ブルュセルにおいてマルクスに會つたときには、彼は既に余がこの文章において述べたやうな明確な言葉で、この學說を表現し、これを余に示したのである。」(註一三)而して、このことを最もよく證明するものは、同年に、マルクスとエンゲルスとが「吾々の從來の哲學的良心の精算をするために」「ヘエゲル後

期哲學の批判の形式で實行された「厚い八つ折版二冊の原稿から成る『獨逸觀念形態』を題する論争的著作であつた。この著作は、人も知るやうに、當時の事情の變化のために出版せられず、「その草稿をば鼠の齧つて批判する儘に委せたのである。」(註一四)

註一三 Marx-Engels, Manifesto of the Communist Party, Introduction by Engels, Kerr ed. pp. 7-8.

註一四 Marx, Zur Kritik der politischen Ökonomie. 1859. Vorwort. 9. Auf. S. LVII. 宮川實譯本六一七頁。

この「獨逸觀念形態」は後に部分的に、ベルンシュタイン並にリヤザノフによつて發表せられてゐるが、マルクス・エンゲルスがこの書の中に展開した理論において、後年のマルクシズムが殆んど完成した形態において見出されるのである。故に唯物史觀はリヤザノフのいふやうに「晚くとも一八四五年の秋に形成せられた」といつてゐるのである。(註一五)

註一五 Marx-Engels Archiv, I, Bd. S. 211.

三

「獨逸觀念形態」は後期ヘゲル主義の哲學従つて、その社會主義的表現である「眞

正社會主義」(der wahre Sozialismus)に對する批判であることは、リヤザノフの説明とマルクス・エンゲルスの序文章稿によつて明かである。(註一六)彼等は主張する。「舊ヘゲル主義者は、すべてのものが、ヘゲルの論理的範疇に還元せらるゝや、直ちにこれを理解した。青年ヘゲル主義者は、すべてを宗教的表象にすり換へ、それを神學的と宣言することによつて、批判したのである。青年ヘゲル主義者は、現存世界における宗教、概念及び普遍的なるもの、支配を信ずる點において、舊ヘゲル主義者と一致する。たゞ、一はこの支配をもつて僭奪なりとして闘争し、他はこれを正統なりとして祝福するのである。而して、この青年ヘゲル主義者にあつては、表象、思想、概念が一般に、それから獨立してゐる意識の産物であつて、これが人間の眞實の桎梏と考へられてゐることは、恰度舊ヘゲル主義者において、人間社會の眞の紐帶として説明せられてゐるのと同じであるから、青年ヘゲル主義者は、また、たゞ意識のこの幻想に對して、争闘しなければならぬと解してゐるのである。……青年ヘゲル的觀念論者は、外見的の『世界を振動せしめる』言辭にも拘らず、最大なる保守主義者である。……これらの哲學者の誰れもが、獨逸哲學と

獨逸の現實との關係について、彼等の批判とそれ自らの物質的環境との關係について研究することを思ひ浮んだものはないのである。(註一七)

註一六 Marx-Engels Archiv, I, Bd. Ss. 209, u. 230-232.

註一七 Marx-Engels Archiv, I, Ss. 236-237.

マルクス・エンゲルスは現實の批判において、物質的環境を重要視せよと主張する。人類史の第一の前提は勿論生命ある個人の存在である。この個人の肉體的組織とそれによつて人間に與へられた他の自然に對する關係である。すべての歴史は、この自然的基礎と人間の行動による歴史過程における自然的基礎の變化から出發しなければならぬ。吾々は人間を動物から分つのに、意識、宗教その他吾々の欲する標識をもつてすることが出来るのであるが、人間自らが最初に動物から自らを分ち始めたのは、その生活資料の生産においてである。故に個人の如何なる状態にあるかは、彼の行ふ生産方法に依存するのである。「この生産は人口の増加とともに、行はれる。生産そのものは、再び相互に交易してゐる個人を前提とする。この交易の形態は再び生産によつて條件づけられるのである。」(註一八)

註一八 Marx-Engels Archiv, I, Ss. 237-238.

特定の方法で生産的に活動する諸々の個人は、特定の社會的並に政治的關係に入るのであつて、社會的組織並に國家はこの特定なる諸々の個人の生活過程から成立するものであるが、諸々の個人は、彼等が如何に生産するかによつて、即ち彼等の自由意志とは獨立なる制限、前提及び條件の下に、活動してゐるかによつて、その状態は決定せらるゝのである。思想、觀念、意識の生産は、第一に直接人間の物質的活動並に物質的取引の中に組み合さるゝのである。人間の表象、思惟、精神的交通は人間の物質的行動の直接の流出物である。政治、法律、道德、形而上學の言葉に現はれてゐる精神的生産もまた同じである。人間はその表象、觀念等の生産者である。乍併、その人間は全然生産力の特定なる發展並に、これに相應する取引によつて條件づけられた現實的な活動してゐる人間である。「意識は意識せられた實在以外のものであり得ず、而して、人間の實在はその現實的な生活過程である。」天上から地上に降りて來る獨逸哲學とは全然反對に、こゝでは地上から天に登るのである。「意識が生活を決定するのではなくして、生活が意識を決定するのである。」

註一九 Marx-Engels-Archiv, I, Ss. 238-240

生活のためには、特に、食料、飲料、住宅、衣服、その他のものを要する。最初の歴史的行動は、これらの欲望充足のための手段の製出、即ち物質的生活そのもの、生産であつた。而して、實にこの歴史的行動は、すべての歴史の根本條件であつて、數千年前も、今日も尙ほ、日々時々、人間がその生命を維持するためには、充たされなければならぬところなのである。(註二〇)故に、特定の生産方法または産業的階段は常に共同作用または社會的階段の特定の方法と結び付いてゐる。而して、この共同作用の方法そのものが、一の生産力である。人間に與へられた生産力の量は、社會的狀態を制約し、従つて、人類の歴史は常に、産業並に交換の歴史と、ともに研究せられなければならぬ。(註二一)

註二〇 Marx-Engels-Archiv, I, S. 245.

註二一 Marx-Engels-Archiv, I, S. 246.

生産力の發展は、その基礎を人口の増加に置く、分勞はその必然的結果であり、分

勞の結果は、社會を相對立する家族に區分し、勞働並にその生産物の量的並に質的の不平等な分配は財産の差異を生ぜしめる。財産の差異は社會的階級の發生となり、社會階級間における闘争は國家を必要とする。かくて市民的社會の成立となり、貧富の對立は尖鋭化する。市民的社會の産物たるプロレタリア階級は、かくて一の革命的要素として、成長する。プロレタリアが世界的市場の下に形成せられて、その一般的作朋を意識するとき、プロレタリア即ち共產主義的革命的の可能性は生れる。(註二二)マルクス—エンゲルスはこの革命について次のやうに書いてゐる。

「二、生産力の發展において、一階段に入るのであるが、その階段において、喚び起さるゝ生産力並に交易手段は、現存の諸關係の下においては、たゞ害惡のみを惹起する。それは最早生産力でなくして、破壊力、機械及び貨幣である。——而して、これと關聯することは、社會の利益を享受することなしに、社會のすべての負擔を擔はねばならぬ一階級が形成され、社會から追はれてすべての他の階級に對して、最も決定的な對立を強制せらるゝのである。この階級はすべての社會

成員の多數を形成し、而して、根本的革命的必然性に關する意識、即ち共產主義的意識の出發する階級である。この共產主義的意識は、他の階級の間においても、この階級の地位に關する見解によつて構成せられ得る。

二、一定の生産力を適用し得る諸條件は、社會の特定階級の支配の諸條件である。その所有から形成せらるゝ支配階級の社會的權力は、その實際的理想の表現をそのときどきの國家形態において有する。故に、すべての革命的闘争は、從來支配してゐた一階級に向けられるのである。

三、すべての從來の革命においては、勞作の方法は常に觸れらるゝことなくして止まり、たゞこの勞作の他の分配、他の人々に對する勞働の新らしい分配のみ關してゐた。然るに、共產主義革命は勞作の從來の方法に向けられ、勞働は排除せられ、すべての階級の支配は階級そのものごとくもに止揚せられる。何となれば、共產主義革命は、社會において階級として通用しない。即ち階級として認められてゐない一階級、現在の社會の内部において、すべての階級國民等の解消の表現である一階級によつて行はれるからである。

四、共產主義的意識の大衆的産出並に、この意識そのもの、貫徹のためには、人間の大衆的變更が必要である。このことは、たゞ實際運動において、革命において起り得る。革命は、支配階級が他の方法では顛覆せられ得ないから、必要であるのではなくして、顛覆せんとする階級がたゞ革命においてのみ、社會の新建設の資格を得るために、すべての舊い汗物を排除し得るに至るから必要なのである。(註一三)

註一三 Marx-Engels Archiv, I, Ss. 248-256.

註一四 Marx-Engels Archiv, I, Ss. 257-258.

故にマルクス—エンゲルスにとつては、共產主義は一個の理想ではなくして、一の必然である。曰く、

「共產主義は吾々に對しては、作り出されねばならぬ一の状態ではない。それは、現實がこれを標準としなければならぬ理想ではない。吾々は、現在の状態を止揚する現實的運動を共產主義といふのである。この運動の諸條件は現存の前提から生ずるのである」と。(註一四)

註二四 Marx-Engels Archiv, I, S. 252.

以上が大體「獨逸觀念形態」に現はれた社會思想であつて、マルクス主義の確定的形態はこのときにおいて定まつたと見て差支ないのである。吾々が稍々長くこのことを説明し來つたのは、マルクスの他の流派に對する理論闘争がすべてこの見地を出發點としてゐるからである。

四

吾々はプルウドンとマルクスとの關係に龜裂を生ぜしめたプルウドンの著作「貧困の哲學」とこれに對するマルクスの批判「哲學の貧困」とを語る前に、マルクスの獨逸社會主義者、殊にフォイエエルバッハ哲學から社會主義的結論に到達した眞正社會主義者、殊にカアル・グリンに對するマルクス—エンゲルスの態度について語らなければならぬ。

カアル・グリュンは既に述べたやうに、マルクスの巴里退去後、プルウドンと密接な關係にあり、プルウドンに對して、獨逸哲學の教師たるの役目を勤めるとともに、その社會思想において、プルウドンの影響を受けたのである。而して、グリュンは

マルクスの巴里退去後、巴里における獨逸労働者に對して、可成の勢力を有してゐたのであつた。(註二五)マルクスは後に、彼とプルウドンとグリュンとについて次のやうにいつてゐる。「私は彼——プルウドン——と長時間に互れる、屢々夜を徹することもあつたほどの議論をしてゐる間に、ヘゲル主義を彼に感染させてしまつたのであるが、これは彼にとつては非常に不利益のことであつた。蓋し、彼はドイツ語の心得がなかつたため、順當にこのヘゲル主義なるものを研究することが出来なかつたのである。私がパリから追放せられた後には、カアル・グリュン君が私の始めたことを更らに續けた。が、この獨逸哲學教授に至つては、私に比べるど尙、みづから自己の専門研究について何等理解するところがなかつたといふ長所を有つてゐたのである。」(註二六)

註二五 Vorländer, Marx, S. 102.

註二六 Marx, Elend der Philosophie, S. XXVIII. 高島譯本三五—三六頁。

マルクスは、自己の社會思想上における立場の確立とともに、グリュン、ヘッスな

どを主とする所謂眞正社會主義に對する克服的闘争に従事するに至つた。「獨逸

觀念形態がこのことをその直接の事業とすることは既に説いたが、リヤザノフの報ずるところによると、この著作の未発表の部分において、ゲオルヒ・クウルマン、ブルノオ・パウエルなどを批評し、更らにカアル・グリュンの批判は既に一八四七年の「ウエストフェリッシュェス・ダムブフポット」に発表され、更らにベルンシュタインによつて「ノイエツァイト」第十八巻に発表されてゐるのである。(註二七)

註二七 Marx-Engels Archiv, I, S. 209.

實際運動としての真正社會主義者、殊にカアル・グリュンに對する闘争は、主として、ブルウドン主義に對する反對と關聯して、エンゲルスによつて行はれてゐることは「マルクス—エンゲルス往復書翰集」のエンゲルスのマルクス宛の手紙に現はれてゐる。吾々はこの一二を採録することによつて、マルクス—エンゲルスのグリュン従つて、ブルウドンに對する態度を知るの資料としよう。

一八四六年九月十九日巴里發のエンゲルスの書翰には次のやうな意味が書かれてゐる。自分は今巴里の勞働者達と屢々一緒になつてゐる。それは主として、フォブウル・ウシアントアンヌ出の指物師の主だつた人達である。彼等は研究會

を開いたり、演說會を開催したりしてゐるのであるが、そして、そのことは多少の効果を擧げてゐるのであるが、彼等の間には、その退屈さから襲つて來るある眠む氣が喰ひ入つてゐる。「即ち彼等を仕立職共產主義に對立させるものは、一部はグリュン氏閣下親づから、又一部は權勢張つた老指物師の親方でグリュンの奴隸、アイザマン老爺、なほ一部はアミクス・エヴェルベックが苦心慘憺して彼等に教へ込んだグリュンの人道的語句とグリュン化されたブルウドンより、より以上の何ものでもない。」(註二八)この墮氣を一掃するためには、まづ第一にあの實際に、直接間接、恐ろしく人の氣を阻喪させる影響を及ぼし來つたグリュンを追ひ出さなければならぬのだ。かくして、これらの語句が彼等の腦裡から取り去られ、ば、わたくし彼等と何かしたいと思ふ。(註二九)

註二八 Der Briefwechsel Zwischen Engels und Marx, II, Bd. S. 29. 高橋正男譯「マルクス・エンゲルスの手紙」八七—八八頁。

註二九 Briefwechsel, S. 30. 譯本八九頁。

更らに、エンゲルスはブルウドンの社會改良策について書いてゐる。「ブルウド

ンはグリーンに通譯によると、未だ印刷されざる新著で、無から金を作り、すべての労働者に天國を近づけてやるといふ一大計畫を立てゝゐる。どんなものか、何人も知らなかつた。グリーンは非常にその計畫を秘し、穩し、而かもその仙藥を大いに吹き立てたのだつた。……ところで、この世界救濟案の偉大さを聞きたまへ。英國に久しく存在し、且つ十度も破産したレエボア・バザア、或はレエボア・マーケット、すべての部門のすべての労働者の組合、大倉庫、組合員により供給されたすべての労働は精確に、原生産物プラス労働の經費に従つて、評價され、且つ同様に評價される他の組合生産物で支拂はれるといふことによつて、より以上でも、より以下でもないものだ。組合内で消費される額以上に供給されたものは、世界市場に賣却され、その収益は生産者に拂ひ渡されなければならない。このやうな方法で狡るいプルウドンは、彼及び共同組合員等が仲間商人達の利潤を回避することを見越してゐる。……家父グリーンは勿論この新らしい救ひを信じ、そして早やその心中では、二萬の労働者の組合の先頭に立つてゐる氣であるのだ。……プルウドンといふ男は、かうした事を持ち出した、自分自身及びフランス社會主義者共産主義者を

永久にブルジョア經濟學者の前に曝し物にしてゐるのだ。……」(註三〇)

註三〇 Briefwechsel, I, Ss, 30-31. 譯本九〇—九二頁。

更らに、十月二十三日附巴里投函の書翰には、エンゲルスの以上の労働者間における進出を報じてゐる。「プルウドンの組合プランについては三晩にかけて討議された。最初の内、私は殆んどすべての仲間を敵としたが、遂には唯だアイザアマン及びその他三名のグリーン派を敵とするだけになつた。そのときの主要事項は、暴力革命の必然性を立證し、且つ一般にプルウドンの萬病藥に新生活力を見出した例のグリーンの真正社會主義を反プロレタリア的、小ブルジョア的、シュトラウビンガア的だと證明することであつた。……かくて、私は共産主義者の意圖を、かう定義したのであつた。(一)プロレタリアの利益をブルジョアのそれに對立して主張すること、(二)これをば、私有財産を撤廢し、それに代ふるに財産共有をもつてすることによつて行ふこと、(三)暴力的民主主義的革命以外の、この意圖の貫徹手段を認めざることを。これについては三晩討議された。その二晩目に、三名のグリーン派中の頭目は多數者の氣持を認めて、完全に私の味方に變つた。他の二

人は依然としてそれを認めずに、交々相反對した。今まで一言もいはなかつた多くのグリーン派の者は、一時に口を開き全く私の味方となる決心をしたと宣言した。……」(註三二)

註三一 Briefwechsel I. Ss. 41-42 譯本 一一二—一一五頁。

五

エンゲルスの實際的方面における真正社會主義—プルウドンとグリーン—の克服に對して、マルクスは理論的方面においてこれをなしたのである。マルクスのこの事業は、オットオリュニング(Otto Lüning)の編輯してゐた「ウエスフェリッシュ・ダムブ・ポオト」に掲げた二つの論文である。「フォルクス・トリブンを反對して」をグリーン著佛蘭西及びベルギーにおける社會運動に對する批判である。(註三二)而してグリーンの社會運動論の批判が「獨逸觀念形態」の一部であることは既に記した通りである。

註三二 Gegen den "Volksribun" redigiert von H. Kriege in New York.

I. Verwandlung des Kommunismus in Liebesdienst. Westfälisches Dampfboot. Jühlet. 1846.

II. Ökonomie des Volksribunens und sein Stellung zum jungen Amerika.

Kritik zu Karl Grün; Über die soziale Bewegung in Frankreich und Belgien. ebenda 1847.

この二の論文を始めて研究の對象としたものは、Peter v. Struve, Zwei bisher unbekannt Aufsätze vor Karl Marx aus den vierziger Jahren. Ein Beitrag zur Entstehungsgeschichte des wissenschaftlichen Sozialismus. Neue Zeit. 1896 II. Ss. 4 u. 48 ff.

上記 Grün Soziale Bewegung の批評は、Bernstein によつて發表された。

Karl Marx über Karl Grün als Geschichtsschreiber des Sozialismus. Neue Zeit. 1899-1900. I. Bd. Ss. 4 37. 192. 164.

マルクスはフォルクス・トリブンの編輯者グリュングのセンチメンタリズムを排して、共產主義が現實の事實に當面するものであることを強調してゐる。「フォルクス・トリブンを對する反對」の第一節は「共產主義の愛の夢想への變換」と題するものであるが、その内で、マルクスは次のやうにいつてゐる。

「支配的な貧困を注視することによつて、戦慄する多感の心は、グッコウ氏のいつたやうに、共產主義の最も生氣のある代辨者である。原始基督教の説くやうな普遍的人類愛——それ故に基督教は多くの人々から共產主義の實現であると見られてゐるのである——は、社會改良への理念が發生するところの淵源であ

る。すべての初期の並に多くの近代的社會的努力が一の基督的宗教的外觀を有することは周知のことである。人は同じやうに愛の王國に對抗して、惡しき現實、即ち憎惡を説いた。始めの間は、人はこのことを放棄した。乍併、この愛は第十八世紀において活動しなかつたこと、愛は社會的關係を改造し、その王國を建設することも出来なかつたことを經驗が教へると、この愛が憎惡を克服することも出来なければ、社會改良に必要な力ある行動力をも與へるものでないといふことが明瞭になる。この愛は、何等の現實的な事實的な状態をも克服し得ない感傷的な文章の中に、自己を喪失する。愛は温かい感傷によつて、人を柔弱にする。乍併、困難は人に力を與へる。自ら救はざるべからざるものは、また自らを救ふ。然るが故に、この世界の現實の狀態、即ち産業的交易において、最も發展して現はれてゐる資本及び勞働、即ちブルジョアとプロレタリアの現今の社會における峻嚴なる對立は、社會主義的世界觀の、即ち社會的改良の熱望の他の強く湧出する源泉である。……この鐵の如き必然性は社會主義的努力を普及するとともに、強力なる支持者を造り出す。而して、この必然性は、世界の

すべての多感な心を燃やす、すべての愛より以前に、現在の交通状態の改造によつて、社會主義的改良を開拓するであらう。(註三三)

註三三 Neue Zeit. 1896. II. Ss. 78.

かくの如くして、クライゲのセンチメンタリズムを排して、鐵の如き必然性をその認識の基礎とすることを主張したマルクスは、カアル・グリュンに對しても、同じ缺點、即ち彼等が精神的なるもの、天上的なるものにのみ注目し、または精神的なるもの、現實的基礎の認識不足なる點を指摘してゐる。グリュンの「社會運動批評」は、その全體の歴史的記述において、レイボウ、シュタイン、ヘッスの剽窃であり、その立場において、獨逸眞正社會主義を一步をも超えてゐないことを主張したのである。グリュンはフォイエルバッハに表現せられた獨逸哲學の成果を動かすべからざるものとした。人間即ち純な眞實の人間をもつて、世界歴史の最終目的とし、宗教をもつて、人間の本質の現はれであり、従つて、人間の本質はすべての事象の尺度であるとした。而して、このフォエルバッハ哲學の産物たる獨逸社會主義の貨幣、勞銀、勞働等は、人間の本質の抛棄であるとする眞理を信じ、獨逸社會主義をもつ

て獨逸哲學の眞理と外國社會主義並に共產主義の理論的眞理の具現でありと信じた。かくの如くして彼は、ブルジョアセルと巴里への旅によつたのである。(註三四)

註三四 Karl Marx über Karl Grün als Geschichtsschreiber des Sozialismus. Aus dem Marx-Engelschen Nachlass. Neue Zeit. 1899-1900. I, Bd. S. 7.

「眞正社會主義と獨逸科學(哲學)の稱讚に對するグリューン氏のラッパは、他の思想上の同志がこの點について、提供するすべてのものに優つてゐる。眞正社會主義に關することでは、その稱讚は心から公然と出て来る。たゞグリューン氏の謙讓は、彼以前に他の眞正社會主義者が、二十一ポオゲン「ビュルガアブッフ」ノイエ・アネクドチスにおいて、既に公にしなかつた一言半句をも、發言することを彼に許さなかつたのである。彼の著作を通じて、二十一ポオゲンの七四―八八頁において、ヘッスによつて與へられた佛蘭西社會運動の結構様式を充填し、かくの如くして、その八八頁において、言明された要求に應ずる以外の目的を持つてゐないのである。乍併獨逸哲學に對する稱讚の關する限りにおいては、彼がこの哲學を知らなければ知らないほど、この稱讚の聲は高くなつてゐるのである。

眞正社會主義者の國民的自負即ち、他の世俗的國民に對して「人間」——「人間の本質」の國土としての獨逸に對する誇りは、彼において、その頂點に達してゐる。」(註三五)

註三五 Marx op. cit. Neue Zeit. 1899-1900. I, Bd. S. 7-8.

マルクスは、グリューンに於けるかくの如き現實に關する認識不足なる點を、彼の批判において隨處に示してゐる。

「グリューン君は、彼のフウリエの全批評を次の文章に纏めることが出来る。即ちフウリエは『文明』に對して、『根本的なる批判』を加へなかつた。然らば何故にフウリエはこのことをなさなかつたか。グリューン君のいふところを聞け。

『文明はその現象において、批判せられて、その基礎において批評せられなかつた。文明は、實在的なるものとして、忌避せられ、嘲笑せられたが、その根源に向つて、研究せられなかつた。政治も宗教も批判の裁判廷の前に引き出されなかつた。故に、人間の本質は研究せられずに止まつたのである。』(二〇九頁)

即ちこゝでは、グリューン君は、人間の現實的生活關係を現象とし、然るに、宗教と政

治とをこの現象の基礎及び根源として説明するのである。吾々はこの下手な文章において、如何に真正社會主義者が佛蘭西社會主義者の現實的叙述に對して、獨逸哲學の概念的文章を、より、高き眞理とすると同時に、如何に彼等がその特有の對象たる人間の本質を佛蘭西の社會批判の結果と結合するに努めてゐるかを見ること出来るのである。宗教と政治とが物質的生活關係の基礎と解さるゝならば、すべてのものが窮極において、人間の本質、即ち人間の意識そのもの、研究に歸着することは勿論である。」(註三六)

「……グリーン君は消費するためには、生産せられなければならぬこと、並に、生産に際しては、原料が消費せらるゝことを論證した。彼にとつての本來の困難は、彼が消費するとき、彼が生産しなければならぬことを、彼が證明しなければならぬところに始まるのである。グリーン君は、こゝで、需要と供給の最も平凡で、最も普遍的な關係を明かにせんとして、全く失敗した試みをなしてゐる。彼の消費即ち、彼の需要が新しい供給を作るといふ見解に彼は達した。乍併、彼の需要が有效需要でなければならぬこと、需要が新しい生産を形成するためには、

彼は要求せらるゝ生産物に對して、代價物を提供しなければならぬことを彼は忘れてゐる。同様に經濟學者は、消費と生産の不可分性に關説し、而して、生産過剰が決して起らないことを論證しようとするそのときには、彼等は需要と供給との完全なる一致について關説する。……然るに、グリーン君は、尙ほ、パンは今日においては、蒸氣製粉機によつて、舊時には、風力及び水力製粉機によつて、尙ほ以前には手押挽臼によつて、生産せられたこと、並に、この稱々な生産方法は、單にパンを喰ふことには全然關係なく、即ち「大いに生産しつゝある」グリーン君の考へ及ばなかつた生産の史的發展から生ずるものであることを忘れてゐる。この生産の種々なる階段と、もに、また消費に對する生産の種々なる關係、兩者の種々なる矛盾が與へらるゝこと、この矛盾を理解するためには、たゞ一の觀察から、この矛盾を解決するためには、たゞそのときどきの生産方法並にこの生産方法を基礎とする社會狀態の實際的變革によること、については、グリーン君は氣がつかないのである。」(註三七)

「グリーン君は現實的な生産並に消費關係については、何ごとも知らない、彼

にとつては、真正社會主義者の隠れ場所である人間の本质以外の避難所が残されてゐなかつたのである。同じ理由から、彼は生産からではなく、消費から出發することを固執した。乍併、生産から出發したならば、現實的の生産條件と人間の生産的行動に注意せざるを得ないのである。然るに、人が消費から出發したときには、彼は説明としては、現在『人間の』に消費されてゐないといふ點、『人間の消費』の前提としては、真正なる消費への教育及びそれと同じやうな辭句に觸れるに過ぎないのである。最後に、消費から出發した經濟學者も、正しく、反動的であつたし、競争並に大工業における革命的要素を無視したことを擧ぐべきである。(註三八)

註三六 Neue Zeit. 1899-1900. I, Bd. S. 138.

註三七 Neue Zeit. 1899-1900. I, S. 139-140.

註三八 Neue Zeit. 1899-1900. I, S. 141.

「人間の本质」といふやうな抽象的出發點に、その社會思想の出發點を求めた真正社會主義に對する痛烈なる批判を投げ與へたマルクス、エンゲルスが、一度その立

場を稱讚したにしろ、これと立場を同じくするプルウドンに對しても、批判的克服的態度をとることは寧ろ當然であるといはねばならぬ。まして、プルウドンの根本思想がマルクス—エンゲルスの主張する共產主義の直接の否定たるにおいてをやである。

真正社會主義とマルクスとの關係については、吾々は尙ほ多くの語るべきものを有してゐる。例へば、シュツルツェの主張するやうに、兩者の間には激烈なる論争のあつたにもかゝらず、真正社會主義の出發點とマルクスのそれとは、同じ哲學的なるものを有するや否やの點、(註三九)真正社會主義、殊にロレンツ・シュタインの「現時の佛蘭西における社會主義と共產主義」が、シュツルツェのいふやうに、「マルクスはシュタインの著書によつて、影響せられ、且つ刺激せられた」か否かの問題(註四〇)は、思想史的に見て甚だ興味を喚起すべき研究對象たるを失はないのであるが、今は、吾々の當面の對象を離れざるために、これらの問題をすべて、後日の研究に期して、マルクス—プルウドンの正面衝突の場面に入らなければならぬ。

註三九 Peter v. Struve, Studien und Bemerkungen zur Entwicklungsgeschichte des wissenschaftlichen Sozialismus.

第二十三卷 (一〇八九) プルウドンとマルクス

Neue Zeit. 1897. II, Bd. Ss. 68-81.

註四〇 Zwei bisher unbekannte Aufsätze von Karl Marx etc. Neue Zeit. 1896. II, Bd. Ss. 52-53.

二〇二の二の二の問題に關係する文献は次の如し。

Bernstein, Marx und der "wahre" Sozialismus. Neue Zeit. 1896 II, Bd. Ss. 216 ff.

Mehring, Nochmals Marx und der "wahre" Sozialismus. Ebdenda. S. 396 ff.

Politik und Sozialismus. 1897. II, Bd. S. 449. ff.

Grünfeld, Stein und Gesellschaftslehre 1910.

六

プルウドンは一八四三年から一八四七年の末まで、リオンの石炭並に運送業者オチエ商會に地位を得て、その法律顧問のやうな役をしてゐた。この時期は彼の生涯にあつて、一の重要にして、意義あるものであつた。一方においては、自由なる研究のために、比較的時間を費し得たと同時に實際社會の觀察によき機會を與へられた。この間において、彼の重要な著作「貧困の哲學」は構想せられつゝあつたのである。一八四四年十月にプルウドンは書いてゐる。「今日佛蘭西で社會黨と名づけらるゝものが組織され始めた。既に、ビエル、ルロオ、レイブランその他の多

くの著作家が協調した。民衆は吾々を容れ、宣傳することを始めた。民衆は主役割を買つて出たのである。彼等は、吾々に結合の實例を與へ、而して、彼等を教育せんことを吾々に願つた。ジョルヂ・サントは、吾々の思想を全く自己のものとし、小説家並に評論家は、勝手にそれは利用する。而して、共產主義並に民主主義の矛盾が一度曝露せられ、サン・シモン及びフウリエのユウトピヤがその正當なる程度に復歸せらるゝとき、社會主義は科學の高さに達するであらう。……この時は最早遠くはない。このとき、佛蘭西は必ず人類の先頭にその地位を占めるであらう。社會主義は、まだそれ自らの意識を持つてゐない。今日社會主義は共產主義と自らを呼んでゐる。數十萬、多分數百萬の共產主義者がある。私は、全力をもつて、吾々の間における争闘を止めさすことに努力すると同時に、葛藤を敵陣中に投げるのである。私は、實業家、投機業者、外交家、經濟學者、著作家に對して、順次に精力を集中する。それは文章の上で現はれなければ、早晚恐るべき方法において、現はれねばならぬ集中である。ヨオロツバの社會が吾々の強力な影響を受けないで、——私はこのことについて瞬時も疑つたことがない——世紀の半ばを経過すること

はないであらう。(註四二)

註四一 Müllberger, Proudhon. Ss. 53-54.

プルウドンは沈思勉學した。「人類における秩序の創造」において適用した彼の所謂創造的方法即ち破壊的批判的力面において、矛盾の理論を、建設的方面においては、發展階段の理論を用ゐんと努力した。(註四三)彼の社會に關する新見解を組織大成せんとする苦心は數年を要し、一八四六年にいたつて、脱稿し、印刷に附せらるゝにいたつた。このとき、プルウドンはマルクスから一の書翰を受取つたのである。それはマルクスとエンゲルスによつて企圖せられた英、佛、獨の共產主義者間における通信機關についてである。この共產主義者の通信機關としては、既に、ロンドン及びブリュセルに設けられたので、巴里にもこの通信機關の必要を感じて、マルクスがその機關への参加をプルウドンに乞ふたのであつた。(註四三)このマルクスの書翰に答へた。プルウドンの一八四六年五月十七日附書翰は、既に、マルクスと其の立場を異にすることを明かにしてゐる。

註四二 Proudhon, Bekenntnisse. S. 193.

註四三 Franz Mehring, Karl Marx, Geschichte seines Lebens 1923. Ss. 125-126.

「マルセルがこのマルクスの企圖を Deutsche-französische Jahrbücher へのプルウドンに對する参加勧誘としてゐるのは誤りである。(Müllberger. S. 54) このマルクスの書翰は現在發見せられてゐないやうである。」

「マルクス君！私は喜んで、君の通信の参加者となる。この通信の目的と組織とは、私には非常に有用のやうに思はれる。乍併、私は屢々書くことも、多く書くことも、約束は出來ない。自分は多忙である、性來の無性は手紙を書く努力を私に許さないからである。自分は貴君の手紙の處々から、受けた印象から、次の抗議をする自由を保留したい。……吾々は、もし貴君が欲するなら、共に、社會の法則、如何に、この法則が實現するかの様式、進歩を研究しよう。だが、吾々がすべての先驗的獨斷論を否定した以上は、吾々の側においても、民衆を理窟屋にすることは避けねばならぬ。吾々は貴國人ルウタアの矛盾に陥つてはならぬ。彼はカトリックの矛盾に陥つてはならぬ。彼はカトリックの神學を投げ棄てた後に、プロテスタント神學を建設したのである。……私は、他日すべての見解を創造するといふ貴君の考へに心から同意する。吾々は、よき、さうして尊敬すべ

き論争を行はふ。……尙ほ一言貴君の手紙中の言葉『行動の瞬間において』について述べよう。恐らく貴君は尙ほ現在において、改革は以前に人が革命と名づけた動亂以外の何ものでもない奇襲なくしては、不可能であるといふ意見であらう。私はこの意見を久しく抱懐してゐたから、これを理解し、辯護し、これについて喜んで討論するであらうが、私の長い間の研究が私をして完全に貴君から分れしめたことを、貴君に告白する。吾々は奏功するためには奇襲は必要ではないと信じ、従つて革命的行動を改革の手段として認むべからざることを信ずる。何となれば、この手段は、單にたゞ暴力の慾求に對する呼びかりであり、要するに矛盾だからである。私は問題を次のやうに定める。富を一の經濟的結合によつて、社會に逆流せしめ、他の結合によつて、富は社會から取り去らるゝであらう。他の言葉でいへば、經濟學における財産理論を財産に對して、獨逸社會主義者の諸君が共産と呼び、私が今、自由平等と名づくべく決定したところのものを作るべき方法に對して、衝突せしめる。かくて、私は、簡單にこの問題を解決すべき手段を知ると信ずる。私は、財産を小銃火をもつて崩壊せしめる方が、財

産所有者の聖バルトロモイス祭の殺戮によつて、それに新たな勢力を加へるよりは、よいと思ふ。——現在その半ば印刷せられてゐる私の次の著述は、このことについて、多くを貴兄に語るであらう。——私の愛する哲學者よ、私は今この立場に立つてゐる。自分が思ひ異ひをしてゐるならば、そして必要な場合には、貴君の手によつて懲罰せらるゝだろう。自分は、復讐を期して、喜んでそれに服するであらう。……」(註四四)

註四四 Milberger, Proudhon, Sa. 54-56.

七

マルクス宛書翰中に挙げられたプルウドンの著作は、二冊本の大冊となつて、一八四六年十月市場に現はれた。「經濟的矛盾の體系または貧困の哲學」(Système des Contradictions économiques ou Philosophie de la Misère)と題するものであつた。

「經濟的矛盾の體系は經濟學と社會主義の見地を批判することによつて、自己の綜合的體系を建設せんとしたのである。經濟學とは、財の生産及び分配に係する道德、習慣、傳統に関する自然史である。従つて經濟學は、事實的、法律的に基礎づ

けられてゐる。社會主義は現在の社會組織及び從來の制度が變則的であると主張する。文明の制度は悪であり、矛盾に充ちたもので、従つて、その目的に適應せず、その中核に、抑壓、即ち貧困と犯罪とを生むと主張する。彼等に従へば、經濟學は一の盜奪と貧困との組織的實踐である。經濟學は自利主義の見地からする財産の原理の上に立つてゐるのに、社會主義は、結合の原理の上に立つて、社會經濟を徹底的に改造せんとする。かくて經濟學者は、自利を神聖なりとし、社會主義者は、共產主義を夢想する。(註四五)

註四五 Proudhon, Aus der "Philosophie des Elendes," in "Proudhon und der Individualismus," Ss. 49-50.

經濟學の建設者は、素朴にして、不充分なる人間生活の發端をもつて、既に科學の對象となし、社會主義者は、傳來的なるものゝすべてを惡として一掃することによつて、現實的基礎を失つてゐる。プルウドンはこの兩者に反對して、社會の全生活に關する統一的認識とその相互的に生起する行爲に關する認識、即ち人類の過去と將來とを包含する認識による統一的科學を建設せんとしたのである。彼は、ヘーゲルとともに、實在と思惟、即ち現實的生活と科學とを同視することによつて、彼

は辨證法によつて、經濟状態に生じた對立をそのより高き概念統一を發見せんとしたのである。而して、この人類の史的發展と同一なる思惟過程を真正なる經濟學の内容としたのである。

プルウドンは、その推理を價值概念における對立の發展をもつて始めた。それは效用價值と交換價值の對立である。この二つの價值は、本質的には、社會的關係である。財の存在量多きときは、その效用如何に大なりとも、價值はない。故に兩者は密接な關係を有する。效用價值は、交換價值の必然的條件であり、反對に、交換價值は社會的效用性の條件である。然るにも拘らず、兩者は相互に反對の關係にある。交換價值を決定するものは、效用性でも、生産において費された勞働量でもなければ、生産費の高きまたは低き収益でもなく、單に、稀少性である。この對立は、全歴史的經濟を支配したもので、現在の社會の惱んでゐるすべての經濟的害惡の根源である。

プルウドンはこの對立を次の如き新しい價值概念によつて、止揚せんと試みたのである。財を生産し、全體の富におけるその相互關係を決定する力は既にア

ダム・スミスが雄辯に主張してゐるやうに、労働である。この労働なる要素の全體を構成するために、加へられた量が價值である。この定義に従へば、效用價值も交換價值も共に、その完成せられた形態において、全く一致する。價值は、生産物全體に對する生産物の經濟的關係において、價值が確定的なるものを有するものにおいて、效用價值を包含する。效用價值は、社會的價值を基礎づける。これなくしては、生産物は、富の根底たることを廢するであらう。價值は、變動的なるものを有するものにおいて、交換價值を包含する。この關係は、可動的であり、新しい要素の附加によつて、その瞬間に別のものとなる。故に、この個々の生産物の他の生産物に對する交換能力も異なるのである。

乍併、この價值概念における效用性は、最早、單なる個人的享樂に役立つ能力ではない。それは全體に對する一關係である。従つて、價值の變化は一の法則によつて支配せらるゝと、もに、この法則は效用價值及び交換價值の對立をも止揚する。すべての財は、その生産に、労働を要することが少なければ、少ないほど、故にまた、生産物が全體の富の形式に對して寄與する程度が少なければ、少ないほど、益々必要

となるのである。別の言葉でいへば、社會の發展とその富とは、生産費用の絶えざる減少と、すべての生産物の必要性の絶えざる増大とを齎らすといふ法則である。この新價值概念は、この概念の内に止揚せられた對立的概念の全く持つてゐない独自の性質を有する。即ち社會的價值を決定する唯一のものが、労働で、従つて、價值法則の負擔者であるので、時間で量られた労働が價值の唯一の眞の尺度で、それ故に、同時に、すべての個人の正當なる勞銀の標準である。従つて、價值關係の理論は、全く、平等と正義との理論である。かくの如きプルウドンの價值理論は、彼の社會思想全體に對して重大なる意義を持つ。價值理論は、交換の標準であるとともに、人類の全社會的發展に對する鍵である。何となれば、社會的價值を構成せんとする努力は、正義と平等に對する努力と同じであるから、この價值の實現は、すべての社會的福祉の條件であり、全人類の偉大にして、普遍的なる目的である。(註四六)

註四六 Bruno Hildebrand, Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft 1848. Sammlung sozialwissenschaftlicher Meister Bd. 22. Ss. 231-239.

八

以上のやうな根本思想からプルウドンは人類の個々の經濟發展階段を述べ、これを十に分つてゐる。

原始においては貧困が人類の一般的運命であつて、すべてのものは消極的平等であつたのである。この貧困に對して、最初の戦を宣したのが労働で、労働は分勞において組織せられた。これが第一階段である。分勞は生産力を増加して、生産物を豊富にし、貧困を征服した。それととも、分勞はその反對物を作ることによつて、自分の目的を否定した。それは労働を機械的にするととも、財産所有者のみのために勤めることとなり、彼等は自由の状態から、動物的隷屬に入つた。分勞の發達ととも、労働は退化した。

第二階段において、この對立物は機械によりて止揚せられた。機械は労働者の疲勞を減じた。労働の機械的部分を除去すると同時に、生産費の低減によつて、一般幸福の媒介者たる役を勤めたが、これと同じくその對立者を持つてゐる。機械は労働者の労働を停止し、その生産行動を制限するととも、資本を労働者の制限から除去して、機械力の奴隸たらしめた。

第三階段において、この機械と労働者の闘争は競争によつて、止揚せられた。競争は労働者を解放して、獨立の力たらしめ、その能力の自由な使用を許すととも、資本家間の競争によつて、資本の支配を制限し、生産物の眞價を具現せしめた。競争は必然的に、人間労働力の完全なる發達を齎らす。乍併、競争は、強者の専制と弱者の抑壓とを齎らす。労働者はその食を奪はれ、正義の觀念はその影をひそめ、生産物の價格の高低、常なく、その無秩序なる變動は遂に獨占到至らしめる。

第四階段において、獨占が競争を止揚する。獨占は、個人の權利に對する正當なる防衛者である。それは個人の創造のために、彼の費したその健康と財産とに對する社會の報償である。これなくしては、社會に對して、個人は何等の貢獻を爲し得ない。發明家は、もし彼に獨占が許されないならば、恐らく、その發明をその墓の中に持ち去るであらう。然るに獨占もまたその腐敗的方面を有する。獨占は労働金を抵下せしめる。それは、その侵略を益、増大して行く。而して、獨占は、あらゆる事物を、社會のために、全體の富との關係においてではなく、たゞ私人の利益のために評價する。價値決定も、その社會的性質を失つて、たゞ個人の利益の恣意的な關係

によつてなされる。

第五階段においては、國家が中心に現はれる。獨占によつて労働者はそのすべてを奪ひ去られたので、國家は價値の構について、新しい時代を出現せしめる。國家は獨占者に獨占を許して置くのであるが、労働者救済のために、獨占者に租税を賦課する。國家は、土地所有者、工業家から、その所得の一部を取り去り、商業の獨占に課税するために、關税を制定して、労働者の向上を計り、獨占の悪作用を制限するため、一般的施設をなす。その所要の費用は、租税によつて獨占者をして支拂はしめるのである。かくの如き國家の労働者のためにする租税及び警察も、一の矛盾を包含して、プロレタリアの不利益となる。何となれば、獨占者に賦課せられた租税は再び労働者に轉嫁せらるゝからである。財産高に比例する租税は、小額の財産所有者を壓迫する。平等の原則によつて、賦課せられた租税が、市民の不平等を助長する。累進財産税の場合には、資本家は労働者よりも比較的多数に支拂ふのであるが、經營資本に課せらるゝ場合は、資本家はこれを生産費に組み入れ、生産物に課せられた場合には、生産物の販賣價格を引き上げることによつて、これを

消費者に轉嫁し得る。資本家の負擔する場合には、生産の減少となり、労働需要の機會を減少する。

第六階段。國家内部における警察並に租税によるプロレタリア向上の結果に失望して、社會はその辨證法的運動において、その領域外において、保證を獲せんとした。外國貿易による販路の擴張によつて、労働は需要せられ、従つて労働者は増加して、労働者はその租税によつて失つたところを填充することが出来る。乍併、外國貿易は直ちに、二つの相撞着する學說、即ち絶對自由の學說と禁止の學說を生ぜしめた。絶對自由貿易説は個人的自由論の必然的結果であつて、生産物消費に對して、分勞の法則を適用したに過ぎないのである。國際貿易は、單に、競争の原理の擴張に外ならぬ。従つて競争に伴ふ利益を伴ふのである。然るに保護關税は、内國工業に優先權を與ふるために、個人の欲望を充足するに、高價ならしめ、従つて消費高の私權の絶えざる侵害である。故に、禁止または保護制度は、生産を奨励するどゝもに、消費を抑壓する。そは、外國の競争の代りに、内國の競争を激烈ならしめる。自由貿易は、通信及び交通の障害を除去することによつて、すべての對立を普

遍化する。それは資本の支配を貨幣貴族主義を普遍化する。

第七階段。外國貿易によつて、労働者状態改善の保證は得られないので、第七階段においては、再び國內商業に歸つて、信用において、必要な交易の保證を得んしたのである。貨幣はその生産物を貨幣化せんがための、而して、社會から等價値を獲得せんとする手段である。然るに信用は、この貨幣の特質を擴張的に應用したものである。かくて、生産者は、その生産物の貨幣化を豫想し、國內におけるその販路を容易にする地位に置かしめる。かくの如くして、信用は労働者を保護し、獨占者によつて、労働者に誤用せられた武器を労働者の手中に置くのである。信用もまた相互に矛盾する二つの制度をその中に含有する。その第一は、爲替預金銀行、抵當貸附であり、その第二は、融通並に割引銀行及び一般に紙幣制度である。前者は、鑄貨の増加、良質鑄造、容易なる使用を、後者はこれに反して、鑄貨の廢止と壓迫とをその目的とする。前者の施設は、鑄貨の交換用具として有する不完全性を除去するであらう。後者は爲替、小切手等の振出によつて、貨幣の作用を奪はんとする。この矛盾に對する解決策の考察せられたものは、存在するが、労働者の貧困

を救済するが如きものはないのである。

第八階段。國際貿易並に信用は社會における對立を激化したのみであつたので、社會は次に、財産へ發展した。財産は獨占の一特種類に外ならぬ。獨占そのものは、何等特定の産業、道具、場所に關係はない。それはたゞ利潤を求め得れば足りたのであつた。獨占はその財産への轉化によつて、始めて、その不特定性を除去して、土地に結び付けられ、家族と結合するに至つた。かくて、利潤獲得の手段であつた獨占は、こゝにその目的とせらるゝに至つた。こゝに再び新しい矛盾を包含する。それは同時に福祉の根源であるとともに、貧困の増加でもある。財産は個人の行動の自由を保護し、従つて、人格の力を強大ならしめるとともに、經濟上における利益を増進する。同時に財産はその腐敗的方面を有する。何となれば、財産権はその對象の使用權たることも、誤用悪用の權利だからである。而して、財産所有者はその誤謬に對して、何等の責任にも任せず、その使用を彼自身の利益にのみに従つてなし得るからである。こゝで財産は社會全體の目的と善とに撞着する。

第九階段。財産に對する反動として、共產主義を發生する。これが第九階段で

ある。共産は國家權力の増大である。共産も一の進歩促進の手段であつて、無数の形態において、歴史に現はれる。大事業は多く、共同になされる。道路の築造、圖書館、教育施設の如きは共同である。乍併、共産も一定の程度において、適用し得、人格並にその經濟と一致し得る。婚姻の共同は、性の區別を基礎とする。教育施設においても、授業時間、休憩時間及び授業は共同であるが、勉學そのものは、個人的であり、すべての教育は、天才の利己主義を覺醒せしめることをその課題とする。共同は決して社會の構成原理たることを得ない。そは、相對的に必要であつて、その全部的適用は破壊的效果を持つのである。即ち共産主義は次の如き缺點を持つてゐる。(一)共産主義は、共同の終末をその始めに採つてゐる。何となれば共産主義は、感情及び精神の共同の上に建設せらるゝのであるが、そは、すべての利害の調和においてのみ可能だからである。(二)共同は社會の形象であり、原型である家族と撞着する。何となれば、家族の要素は愛情であつて、従つて家族は、必然的に異なる本質と私有財産の自由なる使用を前提とする。(三)共同は分配の法則なくしては、不可能であり、分配によつて、崩壊する。何となれば、分配は個人化と同義であり、

「汝のもの及び私のもの」といふ觀念を前提とするからである。(四)共同は組織の法則なくしては、不可能であり、それによつて崩壊する。何となれば、組織の最初の最も有力なる手段は分勞だからである。而して分勞は個人主義を建設し、共同を破壊する。

第十階段。プルウドンは、從來の諸階段における經濟的福祉と貧困との對立問題の解決を求めて、第十階段において、遂に人口問題に到達した。人口問題とこれ以前の階段との關係は、プルウドンにおいては、明瞭ではないが、こゝでは、從來のすべての對立の大集成としての貧困を取扱つてゐるのである。プルウドンは、マルサスのいふやうに、困窮が過剰人口の結果によるものではなくして、社會組織の缺陷の作用であるとも、従來の經濟學そのもの、産物だと主張する。人口は幾何級數的割合をもつて増加するのであるが、富は分勞、機械商業等のために、勞働者數の自乗の割合をもつて増加する。故に、正常なる社會においては、貧困問題は最早恐るゝに足らないのである。故に問題として残るところは、全人類の數と餘剩地面との平衡の法則に關することである。勞働は個人の數とも、而して、分

勞機械の應用と、もに、その生産力を増加するばかりでなく、勞働及びその成果の増加と、もに、尙ほ、一の他の運動が平行的に行はれる。勞働は、その完成と、もに、益々人類に對して、集約的困難となり、疲勞的となる。教育及び學修の時間が増加する。享樂の能力についても同様のことがいへる。價値の生産が人間に對して、困難となればなるほど、彼の更生能力は減少する。勞働と生産能力とは、反比例の關係にある。従つて、價値と人口の増加に對しては、益々多くの時間が必要となり、富を四倍し、人口を倍加するに要する期間は益々大となり、遂に、無限大の期間を要するに至り、社會はそのまゝ進歩しつゝ、あるにいたるのである。かくて人口の問題は解決せられ、永久進歩への、而して、益々増加するその生活の精神化への任務を廢することが不可能となる。乍併、この可能性を現實に轉換し、社會を貧窮による没落から救済するためには、真正なる價値の實現によつて、勞働並に、正常なる勞銀の條件が改良せられなければならぬ。如何にして、この改良が行はれ、勞働による價値の決定の問題が解決せらるゝかは、プルウドンの價値論並に信用の考察の場合に、未だ何等の説明も與へられてゐないのである。(註四七)以上がプルウドンの「經

濟的矛盾の體系に現はれた思想の大要である。

註四七

Hildebrand, Nationalökonomie, Ss. 239-256. ヘルツマンの學說敘述に對しては、ヒルデブランドの外次の如きものを参照した。

Proudhon und der Sozialismus. Ausgewählt und eingeleitet von Cohnfried S. Joron. 1920

E. V. Zenker, Der Anarchismus. Kritik und Geschichte der anarchischen Theorie. 1895. Ss. 22 ff.

Friedrich Dobe, P. J. Proudhon. (Der individualistische Anarchist. I. Jahrg. Heft. 8. 1919)

Milberger, Proudhon, S. 57 ff.

Proudhon, Bekenntnisse. S. 193 ff.

九

プルウドンは、彼の著作が完成せらるゝや、これをマルクスに贈つたのである。マルクスは、彼の死後當時を回想していつてゐる。プルウドンは彼の第二の重要著作『貧困の哲學』が出る少し前に、極めて詳細にわたれる一書面をもつてこのことを私に豫告した。——前掲書翰——その中には、『貴下の批判の鞭打を待つ』といふ言葉も含まれてゐた。で、この鞭打はやがて、拙著『貧困の哲學』(パリ一八四七年)をもつて彼の上に下された。而して、これがため、我との交情は永久に斷たれること

ゝなつたのである。(註四八)

註四八 Marx, *Elend der Philosophie*. S. XXVIII. 高島譯本三六頁。

この「哲學の貧困、プルウドンの貧困の哲學に對する回答」(*Misère de la Philosophie. Réponse à la Philosophie de la Misère de M. Proudhon*, 1847, Paris et Bruxelles)はプルウドンに對する正面の攻撃であつた。「プルウドン君は、一種特別の形で、誤解されるといふ不幸を持つた人である。フランスでは、彼は堪能なる獨逸哲學者だとされてゐるが故に、惡しき經濟學者たるの權利を有つてゐる。反對に獨逸では、彼は最も有力なる經濟學者の一人だとされてゐるが故に、惡しき哲學者たることを許されてゐる。吾々は獨逸人たると同時にまた經濟學者たる二重の資格において、この二重の誤謬に對し、抗議を持ち出したくなつたのである。」(註四九)

註四九 *Elend der Philosophie, Vorrede*. 譯本、四七頁。

「哲學の貧困」は甚だ意義重大なる著述である。マルクス自身が「吾々の見解——唯物史觀——の決定的な諸點は一八四七年私がプルウドンに對して公にした『哲學の貧困』の中にたゞ論争の形式においてとあるが、初めて科學的に述べられて

ゐる」といつてゐるのを見ても判る。(註五〇)従つてこの著作の詳細なる研究は、プルウドン批判といふ見地を離れてさへ甚だ重要にして、興味のあることであるが、筆者はこゝにこれを省略しなければならぬ理由を有する。それは、この著作の意義が既に邦文で、精細なる研究論文として發表されてゐるからである。(註五一)乍併、吾々は「哲學の貧困」に關するすべての論述を廢する譯には行かぬ。それは、既に記した通り、プルウドン——マルクスの關係において、實にその最高峰に位するものだからである。従つて吾々は何等かの方法においてこれに關して述べる必要を感ずる。既に述べた通り、本書の價值については、諸學者の見解が述べられてゐるか、私は別の方法において、これに關説して置かふと思ふ。

註五〇 *Kritik der politischen Oekonomie* S. LVII. 宮川實譯本七頁。

註五一 小泉信三、マルクスとプルウドン嘲評——哲學の貧困——「價值論と社會主義」増補版二八六—三一六頁。

それはマルクスのプルウドンの主著に關する書翰である。この書翰はマルクスが「貧困の哲學」讀後直ちに、その價值を批判して、露西亞の友人アネンコフに送つ

たもので、佛蘭西文をもつて書かれ、歴史家スタヅレウ・チの書翰集中のアンネコフ回想の部分に發見せらるゝものである。アンネコフはこの書翰を興味あるものとして、一八七八年スタヅレウ・チに送り、ロシアの有名な著作家にして美文家であるペエ・ポリキンによつて「オイロペイシエ・ア・ポオテ」に載せたのである。リヤザノフはそれを獨譯し更らに「ノイエツ・アイト」に載げたのである。(註五二)筆者はこの書翰の大意を傳へるによつて、マルクスのプルウドン批判を讀者諸君に傳へやうと思ふ。

註五二

Marx über Proudhon. Vorbemerkung des Herausgebers (Rissanoff) Neue Zeit. 3r. Jahrg. I. Bd. 1913. Ss. 821-822. マルクスの書翰は甚だ長いもので、同誌、八二三—八三〇頁までに細字をもつて印刷されてゐる。

一〇

書翰はブリュセル一八四六年十二月二十八日附である。以下その極めて大體の意味を載せる。

「アンネコフ君、貴君の十一月一日附の手紙に對する返事をもし本屋が私に恰度

前週、プルウドン君の著作「貧困の哲學」を送つて寄さなかつたならば、君は久しい以前に受取つてゐたらう。僕は貴君にそれに對する僕の見解を知らせ得るために、それを二日間に讀み終つた。僕は非常に早くそれを讀んだので、精しい點について述べることは出来ないが、それから受けた大體の印象だけは、貴君に知らせ得よう。……僕はこの著作は大體悪い。非常に悪いものだといふことを、あからさまに貴君に告白しよう。プルウドン君が、この畸形で、自惚れた著作で、それで盛裝してゐる「獨逸哲學の末層」については、貴君も手紙の中で揶揄してられる。乍併、貴君も、經濟的發展が哲學的毒によつて、感染せらるゝものでないことを推察しよう。私もまた、經濟的發展の誤謬をプルウドン君の哲學に歸しようなどゝは、しない。プルウドン君は、彼が笑ふべき哲學を有してゐたから、經濟學の誤れる批判を與へたのではなくして、彼が現在の社會状態をその關連において、理解してゐないから、一言にしていへば、プルウドン君が他の多くの人々と同じやうに、フウリエを斥けたから笑ふべき哲學を供給したのである。」

プルウドンは何故に普遍的精神の如きをして、自ら強力の思想家たることを裝

ふために、虚弱なヘゲル主義を用ゆるのであるか。彼は自らこれに對する回答を與へてゐる。彼は歴史において、發展の一聯を見た。進歩を見たのである。而して最後に、個人の行爲と社會の發展との無關係なのを見た。乍併、プルウドンはこの事實に對する説明をなし得なかつた。こゝに普遍的理性がある。神祕的原因を見出すのは、何よりも容易なことである。

社會とは何であるか。人間の相互作用である。人間は、自由に社會形態を撰擇し得るか。決して然らず、生産力發展の一定程度において、人は一定の交易並に、消費の形態を有する。生産、交易、消費の一定發展階段には、一定の社會的秩序、一定の家族身分階級の組織、一言にしていへば、一定の市民的社會がある。一定の市民的社會を前提とすれば、一定の政治的關係がある。プルウドンはこのことをまるで理解してゐない。

人間の全歴史の基礎である生産力を人間は自由に撰擇し得ない。生産力は獲得せられた力だからである。人間の物質的關係はそのすべての關係の基礎であり、この物質的關係こそ、その中において、人間の物質的並に、個人的行動の實現せら

る、必然的形態である。人間は新生産力の獲得と、その生産方法を變へる。而して、生産方法と、もに、すべての經濟的關係を變更する。プルウドンはこの關係を少しも理解してゐない。彼は現實の歴史を跡づけることをしないで、朦朧たる空想の中に歴史を求める。それは、時空を超越した、觀念の歴史であつて、現實世界の歴史ではない。彼に従へば、人間は觀念または永遠の理性に仕へて、この觀念を發展せしめるための道具に過ぎない。プルウドンのいふ進化とは、絶對的觀念の神祕的胎内にあつて、行はるゝ進化である。この神祕的な言葉の幕を開いて見れば、プルウドンは、彼の頭の中に列んでゐる經濟的範疇から成つてゐる秩序を貴君に示したに過ぎぬ。この秩序が如何に不秩序な頭腦によつて、作られたものであるかを證明することは甚だ容易のことである。

プルウドンは、その論述を、十八番の價值論で始めてゐるが、この點については、今觸れずに置かふ。永久理性の經濟的進化は、先づ分勞から始まつてゐる。プルウドンに對しては、分勞とは、全く簡單な事象だ。カスト制度は分勞ではなかつたのか。ギルト制度は？ マヌハ、クトウルにおける分勞と大工業における分勞は

相互に全く異なるものではないか。この普通の經濟學者が述べてゐることさへ、プルウドンは述べてゐない。彼は分勞を口にしながら、世界市場を論じてゐない。殖民地もなく、アジアとヨーロッパとの連絡がコンスタンチノブルを通じて行はれてゐた時代と、第十七世紀における分勞とは、その本質を異にしてゐるのだ。それのみではない。民族の全内的組織、そのすべての國際的關係さへ、特定の分勞の結果ではないか、それは、分勞の變化とともに、必然的に變化しなければならぬのである。プルウドンは、分勞の問題を殆んど理解してゐないので、都會と田舎の分離を擧げてゐない。プルウドンに對しては、この分離は、その起源も發展も知られないのだから、一の永久の法則である。要するに、プルウドンの分勞論は、アダム・スミス以來幾千人もの人間が、いひ古した最も淺薄な殘跡に過ぎない。

第二の進化は機械である。分勞と機械との關係も、プルウドンに對しては、全く神祕的である。すべての種類の分勞は、それ特有の生産用具を持つてゐる。例へば、十七世紀から、十八世紀の半頃まで、人間はすべてを手で作りに出たのではない。彼等は、例へば、紡織機、梭、槓杆だのを持つてゐた。だから、機械を一概に分勞から發

生したやうにいふのは笑ふべきことだ。彼は機械の歴史的起源と發達とについても、何も理解してゐない。最初の一般的恐慌の時期である。一八二五年までは、消費の欲望が生産に先んじてゐて、機械の發展は、市場需要の必然的結果であり、一八二五年以後に機械の發明と應用は、たゞ、勞働者と企業家との間の鬭争の結果だといふことが出来るが、これも英國に通用するばかりである。歐洲諸國は、英國の競争によつて、内外市場において、機械を應用すべく強制せられたに過ぎぬ。米國においては、他國との競争の結果、勞働に不足した結果として、機械を用ゐるに至つたのである。かくの如き事實が存するにも拘らず、プルウドンは第三の進化において、競争の對立物として、機械を擧げ來つたのは、何といふ狡猾であるか。機械を分勞、競争、信用などの範疇と列べるのは、甚だしい愚である。機械は牛、犁など、同じ範疇に屬する。機械の現在における適用は、一の社會的生產關係である。機械の適用は、機械そのものによつて、全然異なるのである。火薬は人を傷けるために用ゐやうと、傷を治療するために用ゐやうと、同じ物質として残つてゐるのである。プルウドンは、その頭の中で、競争、獨占、租稅、貿易の平衡、信用、財産を順次に成立せ

しめたのは彼としては大出来である。英國においては、未だ機械發明以前の第十世紀の始めに、すべての信用制度は殆んど確立せられてゐた。公的信用は、支配者となつたブルジョアジイの興隆が必要とした費用を徴し、その欲望を充足する新手段であつた。プルウドンの體系においては、財産が最後の範疇であつた。現實の世界にあつては、プルウドンの分勞その他のものについて、その全體を形成する。つて、今日吾々が財産と名づけるところのものについて、その全體を形成する。この關係以外の市民的財産は、一の形而上學的、または法律的幻想に外ならぬ。他の時代における財産、例へば封建的財産は、全く他の社會關係の下において發展する。プルウドンは財産を一の獨立的關係として、叙述することによつて、單なる方法上の誤謬のみを侵してゐるのではない。市民的生産のあらゆる形態を結びつける紐帶を彼は理解してゐない。ある特定時代における生産關係の歴史性及び漸次性について、彼は理解しない。彼は現在の社會關係において、何等の歴史の産物を見てゐないのである。

プルウドンは、歴史の見解を缺いてゐるので、人間がその生産力を發展させるこ

とによつて、相互に一定の關係に入ること、並に、この關係は、生産力の變革と發達と共に變化しなければならぬことを理解しない。彼はまたこれらの經濟的範疇が、この事實的關係からの抽象であり、この關係が成立する限りにおいて、眞理であることを發見し得ない。従つて彼は、一特定歴史的時期の經濟法則をもつて、永遠の法則とするブルジョア學者の誤謬に陥ち入つてゐるのである。

次にプルウドンの辨證法についての一例を挙げよう。自由と奴隸は一の對立物を形成する。吾々はこゝで、自由のよき方面と惡しき方面とについて、奴隸の惡しき方面について語るの必要はない。説明しなければならぬ唯一の點は、奴隸の美しい方面である。それは、プロレタリアの間接的奴隸制に關することではなくして、アメリカなどに行はれる直接奴隸制についてである。直接奴隸制は、機械信用などのやうに、現在の産業の樞軸である。奴隸制なくして、木綿なく、木綿なくして、現代の工業は存在しない。奴隸制は、殖民地に價値を與へ、殖民地は、世界商業を作り出し、世界商業は、現代工業の必然的條件である。黒人商業以前においては、殖民地の舊世界に供給したところは、甚だ少なく、世界の面貌を變ずるやうなことは

殆どなかつた。故に奴隸制は最も重要な經濟的範疇である。奴隸制がなければ最も進歩した國土である米國は家長的狀態に變轉するであらう。吾々は世界地圖からアメリカを消すことが出来、商業と現代文明との完全な没落に遭遇するだらう。奴隸制を消滅せしめることは、世界からアメリカを消滅せしめることである。かくの如くして、奴隸は一の經濟的範疇であるが故に、すべての民族において、世界の始めから存在する。近代民族は、自國においては、奴隸制を掩蔽してゐるが、アメリカにおいては、勇敢にこれを輸入した。然るに、プルウドンは、自由と奴隸制の綜合を求めやうとした。自由と奴隸制との平衡を得やうとした。

プルウドンは人間が布、麻布、絹などを生産することを認識した。だが、この認識だけでは大したことではない。彼の認識しなかつたことは、その中で人間が布及び麻布を生産する社會關係をその能力に應じて、形成するといふことである。またその物質的生産方法に従つて、社會關係を形成して人間がこの社會關係の抽象的觀念的表現である觀念、範疇を作るといふことを認識してゐない。かくて、範疇もまたそれを表現してゐる關係と同じやうに永久的ではない。それは、歴史的な、漸

次的な産物である。然るにプルウドンに對しては、反對に、觀念、範疇が本源的のものである。彼に従へば、歴史を作るものは、觀念であつて、人間ではない。人間とその物質的行動とから分離せられた抽象、範疇そのものは、勿論不滅、不變、不動のものであつて、純粹理性の本質であるが、たゞ抽象それ自體は、驚くべき抽象的、ホトウトロギイだといふだけである。かくして、範疇として觀察せられた經濟的關係は、プルウドンにとつては、起源も進歩もない永遠の形式である。彼は、特殊の生命を有するブルジョア社會の生産物が、範疇及び觀念の形態において現はされると、永久的なるものゝ如く考るのである。かくて、彼は、決して、ブルジョアの水準以上には、出でゐないのである。彼はブルジョア社會の歴史性、漸次性を認識し得ず、人間がブルジョアたることを廢するであらう、社會を想像し得なかつたのである。彼は今日の社會を認識し得ないである。従つて、これを克服せんとする運動と、この革命的運動の文章的表現である共産主義を理解し得ないのは、當然であることは、多言を要さない。

プルウドンは感傷的社會主義を攻撃してゐる點で、自分(マルクス)と一致する。

これはセンチメンタリズム以外の何ものでもないのである。乍併、プルウドン自身もまたこのセンチメンタリズムと離るゝこと幾何をいゝたくなる。彼は、頭の頂から足の爪の先まで、小ブルジョアの哲學者であり、經濟學者である。小ブルジョアは發達した社會においては、彼等の社會的狀態から一方においては、社會主義者であるとともに、他方においては、經濟學者である。即ち彼等はブルジョアの華麗のために欺かれると同時に、民衆の苦惱を感ずる。彼等はブルジョアであるとともに、民衆に屬するものでもある。彼等は内心、黨派的でないことを自惚れてゐる。そして、正當なる平衡を發見し、正當なる中間にあることを自惚れてゐる。かくの如き小ブルジョアは、その矛盾を永遠化する。何となれば、矛盾が彼等の生命の基礎だからである。小ブルジョア自身が實際に存する社會的矛盾である。この矛盾の状態を彼等は理論によつて正當化さんとしたのである。プルウドンに貢献ありとすれば、佛蘭西小ブルジョアの科學的解釋たるの點である。

以上がプルウドンの「貧困の哲學」に關するマルクスの書翰の大意であるが、それは宛かも彼の「哲學の貧困」の鳥瞰圖とも見るべきものである。何となれば、マルクス

スは後に「私はこの書——哲學の貧困——の中で、彼——プルウドン——が科學的辯證法の祕密に徹すること如何に少なかつたか、他方にまた、彼が如何に思辯哲學の幻想に共與してゐたか、即ち經濟上の諸範疇をば、物質的生産の一定の發達階段に照應せる歴史的生産事情の理論的表章として、理解することなく、如何にこれを先在的な永遠の觀念に轉化し、この近路を経て、結局如何にブルジョアの經濟學の立場に復歸してゐるか、主としてこれらの事實を指摘したのである。私は更らに、次の事實をも指摘した。それは、即ち、彼が批判を試みてゐるところの「經濟學」に對する、彼の知識が如何に、不備にして、且つ幼稚でさへあるか、また、彼が歴史的運動——それ自身、解放の物質的條件を生ぜしむべき運動——の批判的認識の中から科學を造り出すことをせずして、如何にユウトピストたちの墾みに倣ひ、「社會問題解決」上のアプリアリの公式を提供すべき謂はゆる「科學」なるものを追ひ述べてゐたかといふことである。」(註五三)といつてゐるところと書翰の内容とが一致してゐるかである。

註五三 Marx, Elend der Philosophie. Ss. XXVIII-XXIX. 高島譯本、三六—三七頁、

既に小泉教授もいふやうに、マルクスの『哲學の貧困』を著はす目的が佛蘭西労働者の間におけるプルウドンの勢力を失墜せしめることにあつたならば、マルクスの論法の犀利と用語の辛辣とを以てしても、此目的は充分達せられたとは云ふ事が出来まい。プルウドンは此時以後、猶久しく、殆んどマルクスの生涯を通じて、拉典諸國社會主義思想界における彼れの最強敵であつたからである。(註五四)このことはある程度まで、エンゲルスも認めてゐるところである。(註五五)マルクス・エンゲルスはプルウドンの實踐的運動に對しても、反對の立場を採つた。第一インターナショナルにはけるマルクス主義者とプルウドン主義者との闘争は、これにバックウニン主義者との關係も加はつて、甚だ激烈を極めたが、要するに、マルクス主義は資本主義社會の發展と無産階級の組織的政治運動を主張し、プルウドン主義者は、政治的方法を否定して、經濟的方法即ち信用及び自由交換の制度による平和的解決を主張した點にその闘争の原理的部分は存在した。(註五六)それは根本的立場の相異であつた。而して、この立場は、プルウドンもマルクスも共に、一八四〇年代に

おいて、各自に確立し來つたところの立場である。マルクスの革命的プロレタリアの立場に對するプルウドンの改良的小ブルジョアの立場である。而して、この立場の相異は、前者が佛蘭西社會の研究から、資本主義の最も發達せる英國の社會にその研究を向け、後者が主として佛蘭西——資本主義の尙ほ英國に及ばざる佛蘭西社會にその研究の對象を求めた當然の歸結でなければならぬ。プルウドンのこの立場については、ヘルンシュタイン(註五七)もブウクレ(註五八)も既に認めてゐるところである。

註五四 前掲書、三一六頁。

註五五 Engels, Zur Wohnungsfrage. 序文、拙譯、參照。

註五六 G. M. Stekloff, History of the first International. 1928. pp. 66. #.

註五七 E. Bernstein, Proudhon als Politiker und Publizist. Neue Zeit. 1896 II, Bd. Ss. 609. #.

註五八 Ch. Bônglé, Die soziologische Anschauungen Proudhons in den "Contradictions économiques." Aus den französischen Originalmanuskript übersetzt. Archiv für die Geschichte des Sozialismus und sozialen Bewegung. Zeiter, Jahrgang. 1912. Ss. 98. #.

かくの如きプルウドンの立場にも拘らず、彼はラテン諸國の労働者間において、

彼の熱心な支持者を見出した許りでなく、彼の死後に至つても、獨逸にさへ輸入せられてゐるのである。ミュールベルガアは彼の熱心な研究者で、且つその支持者であつた。彼のプルウドン主義は、エンゲルスをして「住宅問題」に關する一聯の論文を發表せしめる位の勢力たり得たのである。エンゲルスはこの論文の中で、プルウドン並にブルウドンの實際政策を検討すると、ともに、その社會觀、國家觀を最も明瞭な筆致をもつて描いたものである。エンゲルス曰く、「この論争は大した役に立たなかつたのではあるが、兎に角、この自ら『實際的』と呼んでゐる社會主義者の實踐とは、如何なる價值を有するものかの證明を提供した利益はあつた。このすべての社會的害惡の除去に對する實際的提案、社會的全世界救濟法は、常に何處においても、プロレタリアの運動が未だその少年状態にある時代に現はれて來る宗派設立者の製造品である。プルウドンもその一人に屬する」と。(註五九)

註五九 拙譯エンゲルス、住宅問題、マルクス・エンゲルス全集第十二卷、九三頁

而して、その理論的方面について、レニンはいつてゐる。「エンゲルスは『住宅問題』(一八七二年)に關する論文の中で、既に、コンミュニシユンの經驗を利用してゐる、さう

して、幾度も國家に對する革命の課題について語つたのである。かくの如き具體的問題によつて、一方においては、プロレタリア國家と現在の國家との間にある類似、即ち兩者の場合において、國家について語ることを許さるゝ特徴と他方において、その區別の標識と國家の克服への過渡とを説明してゐることは興味あることである。」(註六〇)

註六〇 N. Lenin, Staat und Revolution. Aktionsausgabe. 1918. 552.

實際勢力としてのプルウドンが死滅し、マルクス主義が未だ潑刺たる生氣を保持してゐるのは、理由なしとしないのである。

一九二九・七・一二朝脱稿